

## 編 集 後 記

COVID-19 の流行により、この 2 年間で我々を取り巻く状況は、臨床面を中心に、教育や研究面でも大きく変わりました。流行初期は学会の中止や延期が相次ぎ、その後は学会の Web 化が進み、現地参加の機会が減りました。学会に現地参加する良いところは、発表をし、聴くことのみではなく、参加者同士の交流にあります。私が長年共同研究等の交流を続けている小児科や循環器内科の医師、獣医、工学系の多くの方々とは、学会の懇親会とそれ以降の時間帯で親交を深めました。この貴重な機会の喪失は、特に若い方々に著しい影響を与えており、学会の実地開催を心から願う一人です。

しかし逆の視点もあります。流行前は毎週末のように学会参加していた学会員の方々も多いのではないでしょうか。今は小規模学会の中止、Web 開催による移動時間の節約、学会後の夜の懇親がないことなどにより、週末にある程度まとまった時間をもてる学会員の方々もいるかと思います。（流行への対応のため、より忙しくなった先生方もいらっしゃいますが。）

感染症にまつわる有名なエピソードとして、17 世紀にアイザック・ニュートンが学位を取得したころ、ペストの流行によりケンブリッジ大学が閉鎖されました。彼は 1 年半故郷へ戻り、十分に思考する時間を得た結果、微分積分や、光学のプリズムでの分光の実験、万有引力などの「ニュートンの三大業績」とされるものを成し遂げました。私の周囲でも、この 2 年間で研究を進めたり、新たに研究を開始したりした先生方の話を耳にします。職種は違いますが、自宅近くの小さなレストランでは、客足が少なくなったこの時期を利用して、シェフが料理について研究を重ね、新たなメニューを幾つも創作していました。

状況が常に変化するなか、柔軟に対応する大切さを、この 2 年間で様々な方々から学びました。当学会雑誌も柔軟に効果的な運営を目指していきます。

（高橋 健）